繪本豐臣勲功記

四編 十

遠13
2209
40

特
へ 13
2209
40

繪本豐臣勲功記四編卷之十

目録

秀吉義志不達令幸盛害上
屬怒諫信忠
摂州攻秀吉降高山中川
屬取大失田

平山合戦別所諸士戦死

属 治定最期

受謀秀長陷丹生山柄寨

属 石野合戦

繪本豊臣勲功記四編巻之拾

江戸 八功舎 徳水刪補

秀吉義志不達令幸盛害属怒諫信忠

門を同ふせる伐朋とい志を合きるを友といふ君子の交ハ淡ふしく水の如く小人の交ハ甘ふして醴の如し。茲小秀吉光秀ハ。其功上下ありといへども。同門同志の朋友なり。管鮑の情なくんバあらず。然ハなくして羽柴が功を嫉を猜そく大事の軍を妨ぐること百代の後まで汚名伐りく柿留屋き人とハ知らまくり。然バ然見門の合戦にも伐久間瀧川氏家の人く粉骨なして戦ふ猜つき軍なるもの伐。自己ガ起せ〜過もつく。羽柴にこき伐藏るのそうハ。各号ハ却て遠場を避て。蒔び戦ちんともせざる緯。不義とやいちん不忠とやいちん其のそるを

に意味まで。謀反の萌あるをもさく秀吉の約を背きしこと。兼光秀ぐ所為なり。是いまゞ中國の軍。彷徨き時の熟さゞるふやゆりぬるん朝に雖柴筑前守軍を收めく高倉山ふ立帰る。徳然うして嘆息もく今後の軍ふ中將殿這地ふ出陣まゝまさば必定勝利みるべうし伐妄雲ひうりを霞ふこそ歎きても猶あまりあるを彼て八内府の御本意を遂ゝ得る期のあるべゝと只顧労煩かゞりるうき晒ふに門安ちに八頼て行中ゝ約されたまバ内府ふつゝ御出馬わゝんと其御準備まゝとこ孤ふ信忠公より御使者來りて。御出馬を用の赴伐頻ふまうゝ投らまゝるゞ光秀信盛も使者をまゝ世借に御下向を止ゝそまゝるこれふりて信長ゝにも御出陣伐羅玉ひゝ八御生涯の誤にゝて永き弓矢の恥辱ニハなりふ其のゝみゝに内府ゝう毛利家ゝの射陣を立る

去八早ゝ上月を退去みゝ三木城を攻囲さゝ信忠秀吉への総意より使者携刑八下ゝ来ゝて這言を脇柴へ告たりし八筑前守大ふ悔さ何故御出馬ゑ伐ことふやと氣遣変を て訊祢々ふ使者も苦ふる言伐ゝらゝ中將殿ふ譲ゝるゝ西ゝ亜ふ上使を使ふて飾磨（飾東郡伐ゝ南浦の津也）の御陣ふ参上ゝ。（這時信忠陣を去多の津ゝ移れり）中將殿ふ謁ゝまゝ世内府公ゝう使者ゝくさされ上月退陣のこと伐命せゝれゝ八いうるゝ西ふいそゝと訊祢ふ中將信忠公其義八別の思材ふあゝゝ中國勢八三四年も抑陣ふべき准伐ふく國中の歌も勝多みれバ射戦今度ふ限るべゝゝまつ國中伐頼やく後中國退治ふべきゝと命せふ秀吉座を整ゝ内府の重き命令あゝて中國伐伐を小后ふ許ゝ西ふとこ孤みり獲便るゝゝ毛利の三家出張ふこそ預ひみき有を の一戦遂まうさんふ。從今十

分ふ殿さごとも。一遍欲を逞崩さゞ。後日の恥功をを中ゝ。遠遣内府
帝下向あるをて帝指揮を加へ玉ふ諸軍統一致なさ〜めく。彷利を
得ること必定なるゝん既ふ昨日加藤の独率们過なゝて合戦起こぬ
自軍彷徨紀ふのゆうるがゝ。日令の大將なれ也ふ其ふをた
づゝいそや今上月を退拂ゝ。城中ふ凝守る尼子ゝ雀毛利のため
に攻殺されん。山中が如き誠忠の士八百万の駿車にも易ゝ〜治る
勇士ふ仁義を施ゝ救ひ玉たゞ内府のゝあに。命を弁く忠を竭さ
ん漢ふ法人ゝく韓信忘ま反張良ふもるか劣るまゝ其だゝりかハ
中國攻の導路ふ入ゝ雙の恩ゝり。彼此もつく又救ゝにるハ武
將の恥る所為ゝり。悔くゝ安ち境ゝ遠義を命せあけらまく内府
帝下向まゝ〜まゝとう然るくゝ備君これゝりまふ上月境へ帝出馬あ

るべくゝうもゝくも頼ゝ〜やと懐徹く言状ゝ玉ゝまど。信忠これ城謀〜
玉ゝたこれは固く秀吉も力ゝ〜ゝ〜ゝる舎に帰ま。亀井新十郎と
いふ者を呼出〜。此新十郎ハ尼子の臣なり山中の命を受くゝ内府の出馬ゝ紀事ゝ
ら。讒者ふ事を障ら玉〜ゝ。精〜〜こと玉ゝ門譚〜。俺们遠地を
退去せゞ。彷久ゝらび幸盛侯。殿死せんこと最憾〜。厥を助ゝんとふ
りふの工夫ハ明日早天ふ城中ゝり。歩弱ゝ〜ん方ふ突出。序時ゲ際
我ふ殿〜。我亦其胸一隊をもつく。其隊を破ま て彷久侯を救帰
ま玉まうまゞさふ。密に這中ゝ。山中幸盛ふ通ゝ殿〜。と命を領受〜
新十郎。幸く歩陣を潜行。雛ゝく上月の城ふ入ま秀吉の臣
ゝ通〜ゝけ玉ゝ。幸盛大ふ力ゝ喪〜。備へ信長出陣ゝく。諸勢も帰〜
陣せゝ〜ゝる。天ゝり命ゝり尼ゝ家の運ゝ〜ふ〜て極まりぬ。然を

邪族ゐ妨げられて秀吉
高倉山の
陣を退去ふ

秀吉義志厚く。才功もあ紀俺們を。自力のそふく救出し。後業成料理あてふこと。懇切謝するふ所多し。さハさりながら城中より お義と歌会ハ。要害堅固ふ隊伍を結び。孰陣も弱き方いなし。小勢成もいく大敵に。打破らんことおりひよりゝ。最も秀吉一隊をもつて主君と唱ハ自ハ脚出し。命人まふまそべ々まども。従会ハ之を殿るべし。又秀吉ぶ従会も。我死負ふ多しん。彼今遠ハを全ふまとも。数多の将卒我殿せるハ義とやいさん信とやいさん。勇士の取ざるあり。誠ふ天うり尼子家を亡しふの時ふまで。敢て離ぢり脚むべさ。只遠上ハ俺們を三。敢ふ傳ふく切腹ふる。殘会の命成救ふべしと。新十郎ふうち係ひ。足下再び高倉山ふ出さ。羽柴ぶ芳志の恩を謝しまいし て吾儕ぶ覚悟を告ふと。を体ふこれを羽柴ぶ幹へ遣ゝ。けきば。

秀吉大ふ感嘆ふし。又も竹中ふ使者として。信忠を勧めまゐ。上月に一戦せまくおりんど。嘗て兼顔ふ紀ふり。長嘆ふる緯かざをみく。今ハ尼子を救ふ術尽。遠ふ退陣と決定を。時ふ六月廿七日秀吉情ふ惟徳又命右衛長秀を招ぎ。今夕遠地を退くんとを。然ふを定く中国勢。退陣せんハ必定ふ。こを成拒抗の一計あを。我ハをりて諸将ふ告ふ。嫉妬偏執の漸門。佐久間多くハ用ゐることゆゝ。只足下のみ ありして。工夫ふるをりに。ゆゝ。那般ゝふ告ふ。と退陣の策成示しなれば。長秀慎で兼服ふ。を諸将の陣ふ到を。退路の計略を報けを。名吳織ふく兼知して。我もくと進使せ。白石。秀吉遠を視ふく大に驚び。陣ゝふ絢ゝ明日ハ上月後援の軍ゆり。門ゝ移骨せらをふと。歌方へ偏所ふ。風聴ふ々を。バ中国勢もこれを聞吳然

もはるべしと考へ給ひ淮備なを加へ。織田の陣に黄昏より。焚火の光さかん
ふしく。いかふも兵糧の炊飯の態なり。既ふ廿八日の曉去ころ。上方の諸
勢次第をうつく。東の方へ退拂ふ。筑前守秀吉ハ。高倉山の麓に陣
後て自軍の退陣伐最杳幟見幣してありなゞ。中國勢ハそもと
つんろう。退殿せんと惜りけるを。元春隆家くく制止し。秀吉山上
ふ陣後たまへいなる計策あるんも知まじ。跡忽ふ蒐る度かゝと。靜
却くはりなるも忍羽柴主從距後して。去げく書寫山へ退去せ
へ。うもぐも杳幟なりける次第なり。然りとふ上月城ふハ。織田勢悉
く退陣せしを力なけふ見送るゝ。山中幸盛主こも惜び。主君
勝久にうち向ひ。今日まで数年漂寒して。幸若伐遂ざいとも。主
家再興のしあなりしかども。弓折武運も尽果く。方便ハ莫く通る

道なし。遠上ハ君と小西と深く自害を遂て。諸士を助命みさしめ給
へ。切くこまで忠勇せし。諸士辞車へ賞賜ハなくとも。命ふ易き
て切腹あり。後者を助け給ふ。是大將の仁德ぞと勇めふ勝久莞
爾と笑ひ。よくこを勇めまうしたまき。我も使ふ其意ぞ速に淮備
いさされよと言ふ幸盛大ふ悦び。急ぎ敵陣へ使者をたゝく。城中覚
朝の始終より。諸士の助命伐相遂ける伐。元春隆家こを伐所。麾之
助ハ信義を感し。早速兼諸の返言しく。香川兵部左吏春継香川の検使平
賀六郎左衛門元佐小早川の検使を撰使とて。上月城へたゝく。幸盛
感歎ふこを伐請入し。主君勝久の切腹せし伐。介錯ふし遺骸ども
て給ふ草を。葬ふ操して。自心の所存を。殘りなく演ずを。時十文字
に撥斬ハ。小林勘助介錯せり。時ふ尼子孫四郎勝久行年十九歳山中

廉之助幸盛行年四十又歳なりけるに。歌も自軍も一様ふ憾まゝりの
こそなりなき。既ふを従自宮去けるを。香川平賀の両検使藏を抱
つて帰陣なり。城中の幸幸盛が義言。滅亡ゆく主君(若々き)ば。元
春隆系盛歌なし。君臣の藏城搦挫おさめ。本国雲州富田へ馳りて。
懇ふ葬吊せゝきぬ。備も流石も秀吉ハ尼子主従が自殺を听悲嘆
やるくなれまに。佈摩の本陣ふ到至。信忠公ふ謁しまゆせ。泪
伏流してまうされなる事。小原莽び御出馬を。勧めたてまつるとい
といへども。こゝ伏兼諾まゝまさび。強く帰陣なさ命せふ。尼
子を弁て退去せゝこと。久さぐも杵城うりけるに内府原攻軍幸
にかゆく。点ゝうせゆふことなく。一遍出馬を定めゆたびいろる幸
ふも其日限伏。遠方を進発ふひしに。遠方ふかゆくの先達て御

下向ゆゝべき命せといひ且行中も言状せゝゝ。堅く御出馬の約あ
るゆゝ。余幸に変約ふかゆふのそう。諸将をまゝ退去ふと御下稗
ゆることを心得祢。こゝて孔言を体言せゆんバ。原たるりの通ふ遠ふいかふ
御順ひるけきをとく。其為をりく若とせゝきび。依て無礼を顧び。
理解の玉極伏言状なさん。今ハ益なれ言ゆゝ。後日のためふいへを。備
ふ所しめさるべし。遠般上月を退去せゝと。歌ふ威勢を添さるのそう。
続ぎき軍の号伏をゝ。危ふを捨させゆひゝと。永く御家の和と
ハなれを弁も中将若遠国へ下らせのふハ上月城の後援を去ゆふ
ためなゝびや。それ伏書寫山ふ抑留ゆりて。小原僅俣法ゆまつれども。
内府の御下向まゝまゝと合戦を止させゆふ。その地謀も預了。
推したきども内府の御下向まゝさび。自軍の勝利と謀ゆゝ何

飾摩の陣ゐ
羽柴筑前守
中将信忠を
強諫す

縛も言はせざりしふ。信長ゑまで出陣を止らを帰陣ゐるべき命に是非なく。退去みさせ〜給終。食是議まる邪徒あらん。猶ハ臣が中国退治。事ともゑ中に達功おさぐ。自己が功のるゑ〜やもと。嫉妬偏執の人ゐる者非理と称〜て言はせ〜を。中将ともめ内府まで。實理とおがされ御出馬を。止させまふりのるゑん。是ぞ御父子御生涯の過失と存じたくまゐる。四海一統平均の御志も。彩てハ其功成就〜ゝし。光秀の授去ことハ。弦を離を〜箭よりも疾〜。虚て月日を経をゐうちふ。内府様ともめてまゐ星。忠義の勇士も光衰ゐ〜て。命数終るの期にいゝを。何とく御本意達せゝるべき。織田家の軍威猛なれども。毛利の強衆にハ及をゞるべゞ。歎ふ嘲呼せゝをんこと。拷慨もまゝ〜賜懐ゐりゝ或ハ怨を。或ハ歎き。誠忠一達にまゐしゐる

ふぞ。中将殺〜く御心法ゐを。頻に姫懐せゝをゝり

拾刀攻秀吉降高山中川一馬取大矢田

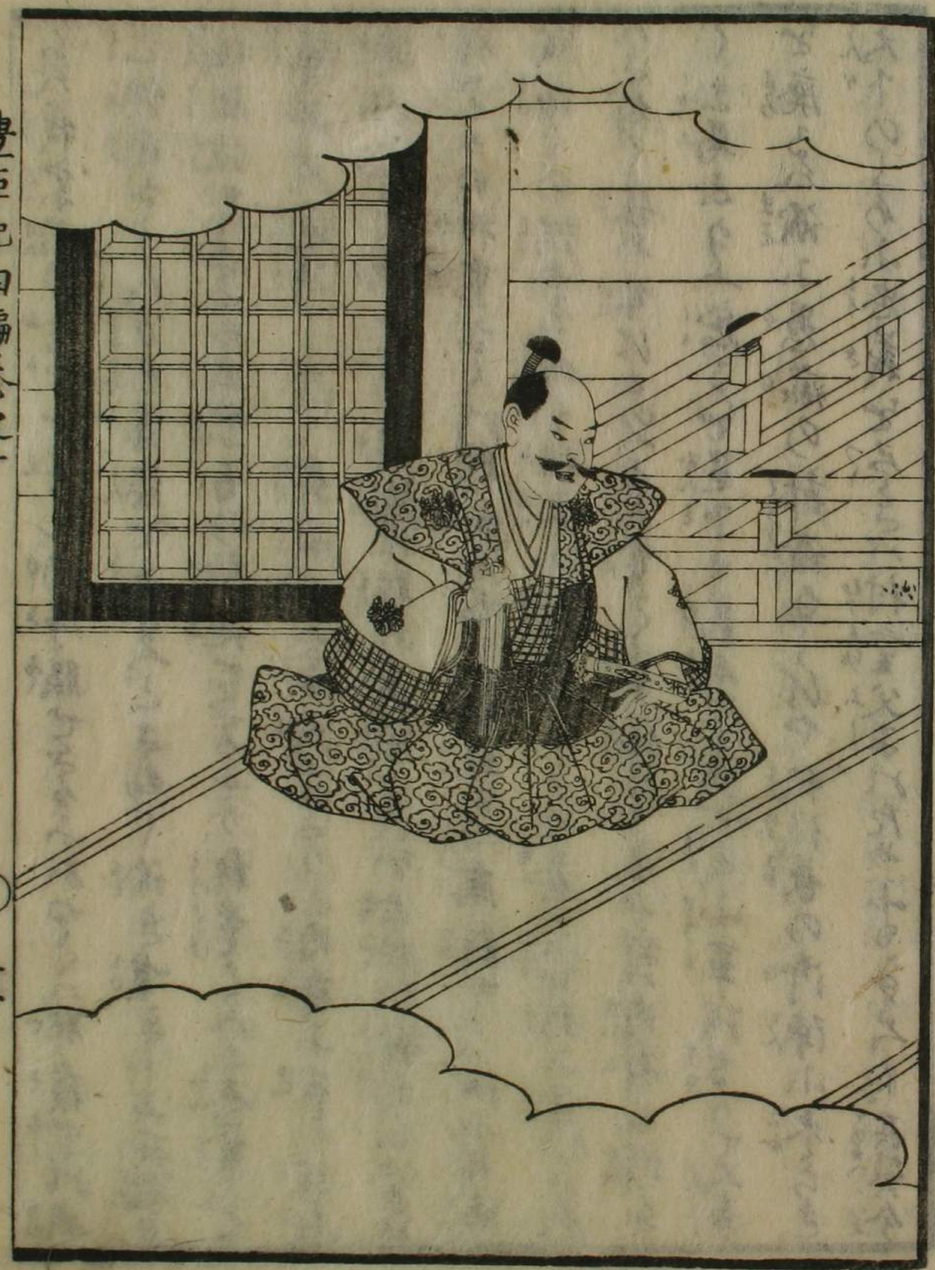
賜くゝるをもつく仁とゐ〜。子くゝゐる従義とを。井中ふ座して天をふゐりとを。是従愚ゐりとを謂ざゝんや。然ハ信忠親柴が深めふかとく姫懐ゐ〜西ひ。光この〜ハ秀吉が面達もゆをハ神吉志殿従攻隔さんとかが〜め〜たち。殺ふ神吉を攻らをゝるふ城兵こひ〜く防ぐといへども織田家の勇士俊猛我ゐる。中にも羽柴う殿肱の臣協坂基閑一番乗に。これふりて要塞破を。大将氏殺ふ補ハ殺父ふる神吉義吉を夫に害せゝれ。城兵總く降参〜ゆれハ。遠圖ふ来て志殿ふ推進に。いまゞ半遠に到ざるうち。城主福橋左京亮。明城ふ〜て退去せゝり。彩まで力を労せゞ〜く。支城ともに陥失ゝを。これをもつて

利道とゝまり。都所へ帰軍せらるべし。備秀吉は一隊をのこして播東播西を攻撃せんと三木の城攻を種々工夫し。まづ軍営を結構せんとて。三木峯山の東面なる平山の峯に秀吉まします。輪廻無きる隊営を張て。西の方には宮部善継房。其峯続なる南面には。脇坂加藤。粉右。蜂須賀。福島。姫路侯。貫くとして。連隊をさせ。要路きびしく備へらる。それは搦手信忠は。搦手を秀吉に任せおかれ八月十六日伐りて。京都へ帰陣せられけるが。軍中に加えらるる。黒田官兵衛清孝村重。頻に内府伐慢む事あり。高倉山の陣にはいりても。秀吉の軍約を背き。合戦を除酒に見えらるしが。帰陣の後は。謀叛の気色あらせられきべ。讒言あるて。虚を混へ内府へ悪行をけるふよう。松井友閑を使者として伊丹の城へ居城の法りをさされ。其趣意を聞しめさるゝに。元来村重兵ふは

なけるとど。誘雲隠を降るふ同く。内府を恨ませまゐらせしが。遠連翰同の使者伐漏て。一端を事にかさめんりのと別心をにらん陳謝らん。然らば内府へ解動うるく。参候ちべきう伐那約ゝ。松井は安土へ帰るとりゝども。黒田の方にも新者ありてその中間を妨げゝべ。遂に安土へ参候せば。これを聚く信長公にも。今は忠びゝくやありけん。十月二日伐りゝく。黒田を伐ゝ。ゝ忠そんと搦手へ進撃する。先陣荒川。惟任。惟任。惟若。安藤。稲葉。氏家侯。此勢合せて二万餘騎。荒川糟塚。右田。要崖ふ攻て陣搦ゝ。信長公は天野山を南に陣とゝ。信忠は天神山ふ陣せる。其外の諸将は金都。蔵屋敷中川清秀の居城へ当向られ。蜂伐結搦ゝ。秀吉は搦手平山に在ゝ。黒田伐の事を聞。行中。浅野ふ後を信せ。三千

徐福を率領して。括州天野山の麓小弛参り。芸州逆治の軍議をなし。秀吉熟く村重が謀叛の趣意を考慮に。これ本心より發起ふいなび。奸人讒者の虚妄を添して。醞せ〜不為と禁悟せ〜ば。いかふもあ〜く村重浅。宮めんと工夫して。い係〜諫勧れども。村重又子猶老臣。内府の信義を忘を恐れ。一図羽柴が誘めふ服せび。依て秀吉又工夫〜。芸州が脇心浅将信に招ぎ。然して后ふ村重をも。自然と帰服させんとおもひ。まづ高槻の城主たる。高山右近長房。芸州が股肱の将佐ふ〜て。殊ふ智勇の将なれば。これを帰服なさ〜めんと方術も遠ふ考る事ふり。当時美邦耶蘇国。ろ。日本へ渡〜邪宗あり。そをが導師を伴天連と称し。諸国を徘徊て愚民を惑す〜。奇怪の術を行ひけるば。遠宗門に帰入して為教をるものをく〜ふ。後ふ歴〜の縣令吏曹

城主国司に至るまで。耶蘇宗門を帰依をけるが。信長にも遠中を所しめされ。彼伴天連を呼寄らを。奇怪を伝仰まく〜るの名秀吉これ浅いさめけるが。信長にも預く邪術を惜れ。遠宗をりて考むまく〜今戦国の時なれば。何の用ふ達こともやと。近づけ置けそと宣ひ〜ば。羽柴もこれふ安達〜て。其後ハ疎く諫めざりしが。高山右近ちゞめよ是。遠伴天連を深く帰依ふ〜。父君の如く考ふこと浅。秀吉偽所〜かば。計略成ぬと内府に謁〜。謀を通ふ〜ふり。固く信長伴天連を呼を。汝高槻の城ふ入く右近を将佐ふ除〜せるば。耶蘇宗門を未永く。日本国ふ立置べ〜。倘亦帰伏なさ〜ぞんを。忽地宗旨を覆絶さん。誓てこれを料理為紀ど。総意状奉て導師伴天連を地ふ高槻の城ふ入是。高山右近に対面ふ〜。内府ふ帰服これふ



筑前守
智を以て
荒木村重を
説き伴天連
を用ひ

らん。我宗門の公事を得ん。倘帰服せざるふかゆくハ。耶蘇宗ハ滅亡覿面ならん。万乙慈愍を垂ゆべ。さるべく詢さ嘆さ〜べ。右近も伝致浅かゝざるも乙。宗旨の断絶せざるゆう。執量さんと返答〜で。導師伐送帰〜たり。秀吉今ハ事成ぬ〜と内府ふ告さく使天連同伴。高槻ふ往て右近に報ぶ。長房これを出近ひ。対面ちけゑ羽柴ゞ曰。村重ゆんと所縁もゆく。謀叛の心底詰かゝ。微ふ自滅伐拒ぐの端ゆ乙。我も他年の熟慮ゆる伐。真文を書ふ忠びざれべ。さゆく孫ゆ喻ゆといへども。嘗て兼語せゝきざれば。内府も彼ふく出馬ちゆふ。結るを見下も義本に義を乙。小事伐ちりて大事を廃るゆ。微ふ愚痴の計儀ゆゝびや。快伝長の陣ふ参らき。天下のゝゆふ忠義を尽さべ。村重父ゆたゆゆもゆるゆ〜。其故ハ今信長公。遠地ゝ出馬ありといへども征伐も尽さ所不存ゆ〜。内府の將伐ゆ虜〜。時く村重に孫静〜て過を伐。和を預ゆ。信長ゆんゆ不義不仁に義本伐征伐せゝるべき。早速帝免ゝんこと。秀吉期合まゝゆ。然もれば是下ゆ義も達〜。忠も達ゆゆゆゆ。諸人試救ゆの仁智若約。これふ超る功ハゆ〜。今帝の義をちり。内府の呼ふ順ゆゆ。牢城ゆゝを村重ふも。帝惜の重ゆく終ふハ義本の浸類一門滅亡せんこと必定ゆ。ふ理を弁さ大事に拠柄。拵沫ゆを所ゆを。是ふ過る義ハゆる乙〜乃夫義本の従類まを亡びんこと伐ゆゆふ忠びゞ。湯く来りて定理伐ゆめを。寸志伐施もとゝろゆ。理非明白に伐ゆけゑハ。高山忽然と量悟ゆ〜誠ふふ乙失理〜て。快く帝陣に参らざること。愚の上れ義にゆん。是下れ教に速雲晴ゆり。只遠上ハ帝前ゆゆ〜。結成ゆひたくまゆゆ。庭を謀うて

絆術あに氣苦も大ふ悦び。然バ本速本〳〵と右近伐ひ天王山
ある内府の御陣に帰来り。御前へ推挙あさ志めなきバ内府御機嫌う
るはしく。御懇の命せありけるを。高山右近もいとありがたく。安達れか
りひに伐〳〵り。義ふ又茨木の城主。中川瀬左衛清秀。義木摂津ちが煙
真実忠二の将佐なれども。遠殺義木が謀叛の事。奸人讒者の所為なれ
バ。清秀これ伐徐諫まを〳〵ども。村重遂ふ所容ざれバ。中川源くこれ伐歎
き。今度羽柴が勧喩機含も。因伐源く和を勧めしが。摂津ちこれにも従
ずこざれを。瀬左清も分ハ勢力なく。義木一家の滅亡に。時来りぬと長
歎しける。秀右平日に清秀が。接群の智勇伐賞美して。方々楽を拓
侍んと。便伐結く主たりまを〳〵が。高山右近ゲ将佐に参う。帰復せ〳〵と
雖便なれど長房をすて勧めさせんと右近を拓ぎく理解を教へ。茨

木の城ふ遣さ〳〵たり。高山右近ハ中川と。忠二の朋友なる由名。跡ふ伐
出迎ひ。摂義相早りて長房偽らく乃弟織田家に属せ〳〵偉。定で忠二ハ
ムにハ不義の所為とかりふバ〳〵れど。城ハ義木ハ自亡をかりひ。真忠義
ハ料理ふり。村重遠殺の謀反ふかいさハ當なる事もあるざるふ虚妄を
信じて内府を恨み止こと伐得ビ歎射せ。村重いふ智のりとも内府
と絆を拳ふくいなでか勝の理ハるんや。亡されんこと眼前ふり。遠殺ふ
ふれ織田家に属し。天下へ忠伐達ると謂ハ。信長を賜しく軍を続め。
伐代の事伐延恐ふさ世。月日絶る際ふ義木を詐め。諸人ふいとされる
バ乃弟一命に替るまぐ内府のム伐和らけ宥め。和平せんこと胸裡ふ
あり。然らバ義木村重をすゞめ。諸士の命を助くること天ふ順ふる通ふら
ばや。遠頃村重絆を容ぬハ。憤恨胸裡に満るゝ色あり。義ども数月を

絶るの分ハ雙方穏便の仏法生せん。殊ハ義本家先年より天下
ハ対して忠功抽されし事ハ備人もよく。これを知る所なれバ其功を
りて罪を贖ひ。宥免を願ハ我一個にく料理さんとう。足下と共ハ
まるにいたらば。嫌便内府足下の智勇殊に貴英し。鋭意せらるべ
方便足下を使ひ給ひ。内府の仏法帰せく后。和平の方術なをさん
と歌し。足下今倘遠理ハ速ひ。内府に帰降去るべん。信長不快
なかのひありて。我糸いハ解紀とも。義語の意ハかつかの。足下せん
ゑとに因く。義本の存亡決定むる所ぞ。願くハ速く用意ありて乃
命と共に忠義を竭し。大功を達ものと通理を責て京しけるにぞ。
瀬兵清素より其意の色ども。村重更ハ孫を寄ひ。信長もまく許
まるゝと覚期を変して牢城せしハ。方便高山ゞ勢むる所ぞ。中

ハ階ひしハ。即便係心の返答して右近と共に城を出羽柴ゞ陣へ参候
ば。秀吉心中大に欣び内府の本陣へ使ハ帰り。信長早速対面せられ
欣悦ありて。直ちに神妙のむね命せられて本領安堵なさしめけ
れバ中川大に感悦ず。恩義を謝して退出たり。秀吉中川氏情地ハ
招き。大矢田の城を安部仁右衛門を將依に守ら。策を示ハ。瀬
兵清素義ハ深く怒ず。急ぎ彼所へ赴きける所も遠大矢田の城といハ
へ大坂伊丹尼崎へ通路自在の處ハ。義本のためハ要の地なり
因て秀吉智謀抜群し。中川を降せ。大矢田城を自軍の有とな
し。大坂伊丹の通路を防ん。と計設し事あるゝ。中川智辯を張横ふし
て。安部仁右衛門を降らせ。其地ハ内府へ渡しけるゝ。信長ましく
感悦せられ仁右衛門。瀬兵清友人へ。南太刀寺馬黄金等賜賜をれど

久しぐも洋謝ゆ〜威服してぞ遥出し

平山合戦別所諸士戦死屬治定最期

羽ゥ九の日城射墜し郷周ゲ雲ゆ掃して。月を販の法ありとも。奇と

て怖ゃにいたりぬ。豊公拳を袖ゆしゃく。即時ゆ三城を降服せ〜ハ實ゆ

怪く奪く威ぶし。然かどゆ秀吉内府の御前に出密に謀計城初

むるに。此歳も暮ゆ逼りぬれを。御陣帰陣ありてあるべきよう。方便を

言状ゆ〜にゆう。内府備陣へ向らきく。兵庫死態須磨の若く急く

放火して。自軍の威光をあめさせられ。其後遠地の衛兵を定むまづ

塚口ゆ神戸信孝惟任長秀。蜂屋頼隆蒲生氏郷。これゆ人ゆる

山右近長房城當刑部を次ゆ毛馬ゆ衛護ゆハ小島信雄織田信包

池門一益武藤宗右衛門を當番部を。倉橋ゆハ池田信之帝国信九帝

中門瀬戸清高信勝力福山に稲葉彦六帝。氏家左京亮安藤平左

衛門ゆ。彩山ゆ織田信澄堀門伯耆守。加藤にハ中將信忠の人数をもって

當置れ。大矢田にハ安彩仁右衛門。彩の如く護国を命ぜられ。備又

羽柴ハ播磨ゆ赴き。惟任ハ丹波ゆ向ふく。敵を攻べき命せありて

信長公にハ十二月廿又日に摂津を發き。安土へ帰陣まゆ〜ける。

當歳も暮て天正七年。羽柴筑前守秀吉へ奮々く播州に下向ゆし。

平山の城ゆ至徒して時〜之を城放ゆ。敵を向引出こん

と。孔始されども別不方ハ恐ぐ出城せざりしゆ。小三帝長治憑ゆて

や備將諸集めく軍議をあに。対ゆ侍大將ある。久米又帝左衛門忠

信。進出。小姓一計を奏こん。汗も今軍城費さんとおやさ。自軍に

を二隊に配一隊ハ秀吉の魁隊に蒐り。まづ一戦を発む蒐〜。二陣の

三木の城
兵謀を
究めて
平山なる
羽柴が
陣へ推
進る

兵にハ俺ハ加へり。奇をもて正として循環始まる。変化常なく。風の如くに攻殺べい所銘き秀吉ありとも。防ぐ方術なるべし。倘又魁を利多に附へられ敵陣に紛投秀吉と刺番へ戦死すべき貴人朝夕影將士と戦さんにハ尋常の計策にくハ勝得べからじと。何代放ちて東しけるかど。濃産一回これを宣とす。長治も共に随ひけ是を明日早く推進爲し。とまづその陣くを定むるに。魁隊大田山城守これに従ふ門くハ別所左近。小野梅右衛門。保住越中守。梶原孫五郎。室田図書。長村図書守。高橋源左衛門。神保民部少輔。大村九郎右衛門。後七十餘人。騎卒を合せて二千五百有餘人。二陣ハ別所小八郎治定。同若左夫光枝。同小四郎。久米五郎左衛門。志水孫四郎。張部五郎右衛門。垂井武義。有田左庫頭。篠山左馬助。張強の勇士六十二人。選兵撰て七百餘人。二月十日

北登天小門を渡つまく推進さう。那須秀吉山上より。遠体を見て冷笑ひ。敵を隊伍を二隊ふつうち。魁軍ハ二十四五百にて。後陣ハ僅六七百なるハ。奇正虚實を変ずる陣なり。先陣ハ大勢をもつて。自軍の魁隊に撃て蒐る。有名の軍を出すと見せ。二陣の選兵六七百ハ。山の麓を推繞らせ。ひそ旗本を襲ふと謀ることの減くしや。先遣敵を激廣にも為し。門く勇戦ます。と自軍の諸士を分撥に。まづ先陣ハ加藤孫五郎。蜂尾義助。中村孫平二。平野梶平。蜂須賀小六。同又十郎。大若林松一。柳市助。後二千餘騎を二隊にしけ。一隊ハ敵と戦ふべし。一隊ハ威勢を助さく。偽ふ進むの体とうを。晴号の旗を岡めりさば。反く返して旗本へ蒐つて。敵の後を断截。倘又青木勘兵衛。木下孫兵衛。井又左衛門。神子田半左衛門。後ハ。二ハ餘騎にて自軍の諸勢退返せ

胸。敵を定て攻寄さんと急に進蒐来る。其胸攻懸横溢う。
進ぐ自軍の魁隊は助け。後を襲ん体とあれ。備旗なハ舎弟
秀長。加藤虎之助。福島市松。丹羽助作。藤堂與右衛門
懸。一ふ徐人。指揮に意しで戦ふ。晴号を傳ふ乃ち紙旗ハ麾推
揉く。岷堆丘ふ攀騎足。騎几に湾つく。後を立て。別所の恵勢ふ四
百平山。近く推進く。隊〻伍〻を列れて。別所の軍を多くふ。急に
鼓を裝戦ふ〻〻とかすひの外ふ一張も出ひ。大内山城ち魁を に指
揮し。数百の弓銃を撃蒐し。其際逆く推進う。胸ふ羽柴ゲ魁陽
の勇士。加藤孫八中村孫尾。蜂須賀又ふの一千五百。突と喫ひて 揮愛
を。大石平野一柳。懸同じく一千五百徐張にく。後隊ふ徳く推進
し。双方突戦一進一休。隊伍を崩さび抱合。大光を表して戦ふ最中

を別所ふ後陣と百徐人。急に横截ふる山の麓を打ち戦て四一門
地小秀右の本陣目當く突蒐る。加藤福島丹羽。喚呼に進て
殺んといふを。秀右制しく示ふ。歩を離ふ労きけれ。後ふ
引倚戦ふこと利ふ」と指揮して待ふ。早くも別所小八郎浩定七百
徐張ふく喚呼。戦ふび喚く愛しく。進を来う。此も猶張ふくこ
そ。羽柴ゲ陣中突投らんと。秀右麾旗打振てふ蒐ふの猶
揮と一斉進ふ。小一郎秀長。ふび。かう後を推把く。一番に進む
ふ〻〻ふ。ふ魁ふ蒐ふ〻〻別所の勇士中野大八郎を撃倚ふ。秀
長の家臣樋口孫右衛。突と紅倚く首を捉る。秀長猶ゆ奮戦ふ
業法左右へ撃立る。其勢猛ふ。者ふ〻ふ。加藤福島丹羽ふの
猛勇士列〻〻て斬紀縞倚。千角万面に紅殺ふけるゲ。別所方にも

小八郎治定弱年なれども名誉の勇士。諸勢に懸まゝ進ませけるふぞ。久米右衛門左衛門忠勝。志水弥七郎主親大勇不敵の豪傑なれど雙方共に名を惜む。義を重ずる者の必死となりて一足も引ず大水となりて戦ひける。斯こうなるまゝ筑前守。晴号の旗を閲めゝ。一遣招けば魁隊なる。二陣の勢れ大谷慶松一柳帝助平野孝兵衛が一千五百餘人烈風の勢く取て返し。別而方の後面より。小八郎が七百餘人を中ふ提綱柳起れを了海ふ猛き別所勢前ふ加藤福島兵ゞ。虎威剛盛の勇士ばかり又後に八大谷平野一柳の多勢をもつて三二三之ふ接起なるべいとかすつく堪るべき雲霞がうちふ戦死帝癖疊くとうく山を添ふ。大將治定これ視ゝより。彩て德勢敗らるべしと一百餘人進後せ〻ふ吾続の兵我出んに進まず一吐ふ

治るべ蒐ければ。別所が魁隊これふ撃まく。備後の陣に別而勢。揉退ふぜんと揉つゝ。備又三木の先隊伝。大内山城守賀相い羽柴が魁隊ふ續く勢れ急ふ返て見るゝ。迫崩さんと進む陣もあく。羽柴が旗本の脇隊伍。青木木下神子田蒲井後。二千餘騎にく横陣ゝ。歓の後陣へ繞らんと。其と見るゝ加藤孫六。蜂須賀小六。中村孫平二。堀尾義助後まくく魏然と猛威を顕ゝ攻る別所の兵雲前後を撃まく。急然として喧起を羽柴が勇士三千又百前後方らべ奮殺去けまた三木勢大半斬捕せ〻また一町許退まくられゝ。治る和へ別所治定面続だゝに殿戚され。漸くゝ引退き。山城守と一隊にある。大内賀相今ゝ後方に方郷もはくぐれを。小八郎を守護ゝて退返さんとゝ。ゝる所へ。秀吉備勢を合隊

久米忠勝
羽柴の
本陣ゟ
投て戰死
セ

と云へる。五千餘騎にて陳際もなく。奮地に進撃されて。勿こ容易ふ退收ぐ〳〵く。再び殿る。軍多し。然るふ久米五郎左衛門忠待。志水ふ七郎左衛門親ハ。頻く戰死と覚期をゐ。敵人堅く諜合せ。軍儀の序れ調に遠さび。紬懍張拵拂弁。甲冑を脱で鬢鬢〳〵。力の絶ふ藏二つ之つ鎗他の傷く徧貫き。柴ぐ兵に紛入つ。旗本近く潜つ。面前を眈と視て認バ大將秀吉將れに誇つ。備軍城指揮してありける由。久米五郎左衛門密に悦ひ。その際十歩に過ざりけ。力銃の藏を拖弁て。血刀打奮秀吉に。逃蒐るを大石慶松。速くも觀屬く注来る。危ふくも中を推陽。久米忠待ふ揖合。過剣がわど戰ひけるぐ。志水孫七郎もまや既ふ。加藤ぐ殿ぐ。たゆふ殿きたりと呼る奇に五郎左衛門。戰ふ聲力も含く脱く。大石ぐ殿きける。然るふ別所小八郎。大内山城守る友人ハ。殘兵を率ひて落行を。羽柴勢さび〳〵く退蒐〳〵ぐ彩さハ容易退收ぐ〳〵しとふ小八郎治定只單待。とつく返〳〵て距城ひ。これふ法ぐいく中備藏人崇本金左衛門松本又左衛門行下金吾兵住孫市中備民部少輔俊。取く返〳〵て戰ひ。總勢も備ふ返さんぜる。別所治定大音あげく。自軍遠ふに退收ぜんと員を尽〳〵て殿る〳〵。これ防戰せるその際ふ。扶退收よと指揮せるにぐん殘ぎど別所方石井左衛門ふ。さ退く。然ども治定を殿せ〳〵と義を重んぜる事百五十餘騎。小八郎を正中ふ。ふ〳〵殿せ〳〵ずのと五百万化し。茶毅後害の紅塵ハ。落花の風ふ揉る。く像く。飛碎横裂の腥烟ハ。篇骨飛ぐ沙伏。案〳〵。髓血流く泥を濺る小時。際に別所の勇士小八郎伏そ〳〵めと〳〵て。崇本中備行下ゐんど一

百五十有餘人。負を決して戰死おりり。這際に大内賀相八五百ばかりの兵士を率ゐて三木城中へ退入り。嗚呼悔むべし別所長治愚淺慮の軍を義めく股肱の勇士三十餘人雜兵およそ八九百殿まつけ。這國那國離散せること負勢甚だ大敗軍を爲したりしい慎む爲べし後慮あるべ

受謀秀長隔丹生山柄寨屬石野合戰

旌を万里の外に懸て威を嵬山の西に揚ると豊公今這に西國を伐のちぐめ功漸くに成来る人雄向が落に的當て義に義本播津守村重内府を恨と謀叛せ〜ゑ。別所長治これに為て搖〜義本り把城兵庫。花隈へ退通〜て播州丹生山に柄寨を搖つ三木より三宅典平次郎橋平左衛門の女人に二百餘人の兵士投置そのわり近郷に置の一揆。二百餘人を加へ〜り所も這丹生山と号る八方西方一の要崖にしく嶺峻く澤險く巖高〜でハ除れ絶不ゑ〜これに依て先建て兵利家より送りし兵根を。這山寨に納置く堅く〜こと成獲らめ猶程遠き淡河の城に。淡河彈正定範に五百餘人を相添く丹生山危急を助けさ依。然るに秀吉寄新城繞ら〜丹生の柄寨を隔〜て試んと屢工夫を凝〜けるる。憶と一計策を出〜播州に熟〜る兵士を六十餘人撰出〜。その外に亦独車を五十人ばかり呼寄てこれに紙旗あまた〜拔持あ。雖把もまこれに意とて進後おちかく怒を出播州の兵士蹟に絶うせ。寄計を精〜く倡含め二月廿六日の夜機會〜風吹加けを。これ究竟の時節ゑうと秀吉の頃より這兵士を丹生山上へ落登ゑ。慈〜く舎弟秀長に三千餘騎

を付属なし丹生山の麓に推進させ。山上の暗号を聴バ。那般〻に斯らふ圍しと謀計仔細ふ下辞なしく。潜越に洗かしたり。然れどふ六十餘人の潜術の兵ま。丹生山の側ふ到りけるが。黒白もわかぬ闇といひ。殊ふ風雨烈しくして。瞻仰ども知らざりけれども。平生鍛錬が仁愛ふ投命志たる忠臣なれバ。嶮る嶮径雑木を厭ず。崩根を攀。木の根を便り。藤葛に助られく。辛手芳是壁へんかくなくかゝふじて岸に登り忍。堞洲に倚て城内找。遠視つ近視つ窺覩ふこれまで一度も敵兵の攀跨たる縡さへなく。増てや風雨の烈しき夜なれバ義卒等も小心せず。合悉く熟睡して鼾の声外に聞へく燈燭さへもかのぐらし。六十餘人ハ微果よりと欣ひ囁合。生捕して堞を奪ふ途都く城中へ潜投たりまつさ五十人の徒卒们ハ麓

の邊より山上まで。二三人づゝ次第に立連。準備なしたる紙旗火炬樹この梢に結着。城中暗号の火の発に随ひ。遠火把へ火を移さんと竚待を呑で溪在たり。麓の方にハ羽柴秀長。三千餘人を一面に列ね。果多の旌を翻させこれも同じく山上の。暗号を方纔やと仰ぎ窺ふ。潜りけるかどふ城内へ潜投たる六十餘人ハ。公廨この厰舎〻へ一時ふ火を放。發喊を挙。今宵夜討こそ投たるなれと呼わり喚きり征廻る。城兵等ハこの東西南ふ。慌忙き噪動なし。睡醒に衾援も視わかで。合赤裸にて奔走し。火の発勢に駭れく。六十餘人を城の声を。百万人も城中へ乱入したりと心怖て。防戦もすべき所存ハなく。遁迯んと狼狽まどふ中にも。郷武一揆等ハ。氣も魂も身に添で。深谷へ跳び墮るもあり。崩角樹根ふ躓き。百瀬千倒あわてさわぎけり。麓を見んれバ

小市郎
秀長謀を受て
丹生山の柄寨を
焼陷す

数万の歓呼。次第ふ山が崖へ攻登るとつんえさく悔しく火炬のひへ旗幟幡連こうく淀りゑ。これふいつゆく怪さ怖き。完然栖香の野火に達く。翼を焼き〜係くゑり。三宅與平二。高橋平左衛門俊遠逃出路を見めく。こ本城當て敗走ちけき。羽柴が兵。多も濡さ丹生山柄寨を奪取る。暁ころる當天に。秀長人負を奥卒して。孤ことと柄寨に投積駐えろる兵糧。悉く蘇に運命し。平山の陣ふ賜せつ。秀長猶も諸士に指揮ゑ。遠岩を抜さ淀河ふ推進せ。彼一城をも系破らんと。こゑ一百ゑ十餘人ふ。淀城せゑと徇流しなり。瞰ふ淀河の城を洗河彈正定範ハ。軍慮に賢に勇將ゑき。丹生山の柄寨落ちと所必定歓呼遠城へ推進ゑ〜と推量ゑ。諸士を集めふ〜く調ゆ。歓遠城へも進るゑんふ。當城に淀く防ゆんり。歓進ゑる路へ出。斉を設けく敵にハちかゞと五百餘人の從士伐率し淀河の城を一里ゆゞ東へ出て地の理を量り路の左右ハ深林ふ二百人づ埋伏させ殘る百人の軍士ふハ鋤鍬鎌ゑど把持せ。路補藏ちる伏伐ゑ。遠堤那堤に群り立ゆ。斯射時のあり〜も。初〜に秀長の魁隊一千餘人徐徐ちる敷ふ接ふ林ぐ推進しが羽柴ゑ斥候也返りて淀河の雑兵百人をかり道路伐掃除しゆうく。何の淀彼も多に。さゑゆと若ふ羽柴が惰兵共そ急に息に退散〜て。軍勢急ふ淀河ハ推進せ乗入ふせ〜と蜂起鋤鍬持たる雑兵共を。四角八面ふ退散せ。百人ゑ〜ゆ乗ハ。狭騒さて散乱ちける伐。羽柴ゑ兵士後。彷ふ濡りく。追殺せんとちる所へ路の左右へ堤伐ちゑ〜し四百餘人の淀河敷一時に發つく。ち統撃起。暗窓却り煙の中より長賊把て左右四百有餘徐涌て出。激流をもく抜け徐く

おりても振らで棚起けもを。秀長の兵士猛けきども。懐殺けぬ事を
るゝ。怪忙き級走をゝる氏。淡河の孫四郎推把。こゞ〳〵魁ふ征出く。敵
二十待かど殿捏て。巻く。逆場氏逆收。淡河の城へ帰りけるゞ要崖よか
らぬ城みれを大勢れ敵を。ゆさうけく。防戦もゞき地ふりゞ。幸号を
して城を奪れ。賜駄車を横ちん〳〵。逆勢の減ぬうち。早く三
本へ逆收ゞ〳〵。諸勢を率しく淡河を発出。三本城當く退氏
ゝること。賢〳〵ゝる拳止ゝる色。逆胸羽柴秀長ハ魁軍れ敗れを大
ふ噴り。三千餘騎を一捲にして淡河の城へ推進ゝゝる。敵一人もあら
ざりけもハ丹生淡河の両城ふ番兵ゞ〳〵殘〳〵逆即便平山へ陣
去ゝもバ秀吉大ふ欣悦せられ秀長ゝ〳〵ふ諸勇士の戦労を褒
く勲賞め。食禁〳〵褒賞ふ〳〵。逆般の功労悟大ふ。若干の兵糧を

得ゝ。三本ゝ三本ゝ。庫花限への通路を断截ゝゝふゞ。三本方
にも別所方ふ。消息の繰偵ゝ。雙方共ふ離発ゝ。別所方ふ
捕刈く兵糧運ゝゝゝる。若びゝ毛利の扶助を預ふ。三百餘艘の
糧船を。赤穂の海へ運搬し。明石郡魚隅郡の色へ漕倅。三本城中
を扶續んとゝ。秀吉預てこれを案悟し。三本と魚隅の中間へ。三十餘
箇所の柄城を搭へ。歩の通路を新截く。堅固ふこれ城守しむ。三本
の城ゝ。おかいふ固若し。いかふゝ〳〵通路閉氏。毛利の兵糧を逆
入人。大内山城ゝ別所喜左夫加古左京亮。梶原平三兵衛。魚隅
隼人意隔任人那波右近将監那波城主垂井民部明石郡喜撫梯橋又弟次郎加
これらの門く一謀し合せ。各自勢を引率して。時刻を遠〳〵撃て
発。一隊とゝ。ゝて推進し。神子田太郎。古田吉左衛門。中條小吉低

が凝ちくる。石野新の砦へ驀地に推進。単縛急に攻起る。神子田方
陣つ。これ伏視く。敵兵彩まで種けを。愈に防禦あさんより只突出
しく戦ふ〻〻と五百餘人を魚鱗ふとるへ。風を用く正一門地に面
も振〻〻撃て発。多勢の中へ乱殺して。縦横奮畫と掛搦る。二本勢これ
を中に捕捕。吾統の陣足にく。只一拗に撃倒せと一吹に放つ統霰に戦
死者無数〻〻中ふも古田右方勝つ。伺脇うされく馬より陥るを垂
井民部負傷捉〻り。神子田中務今ハ手減され。発
や敵軍とつくる。ふ陣の柄塞に凝守る。中村孫平次。勝須賀小兵。
平野権平三方より。吾石今村中石野の三方百有餘騎を引率し。及く下石野へ
馳来り。横槍入く掛起れた。神子田。中務等力を得く。息地隊伍を
立整〻。続進で拠く戦ふ。今ハ二本勢大に疲労〻。合戦難危に及

ぶ機会うく。秀吉彩と所よりも快打義と指揮のちくさうり。加藤虎之
助。同孫六。福島市松。片桐助作ら。一千餘人を率随へ。別所勢の後よ
り。猛勢もるさで撃く蒐る。類くに狂起け出た。二本方ハ大慌
ふ〻〻。彩〻と〻く敵乱に。遠中ふ成る垂井民部ハ最前右田右方
陣つ。首撥斬く老黨ある。早石新右に齎せ〻。加藤清正これを
視く自軍の戦を忘れふ。敵へ阿容〻く揖〻〻。退せうへ
せと呼ふり喚ふり。憤ふく退蒐れた。垂井民部ハ〻〻〻〻〻
陸を蹟て。拠く合。清正垂井をあらひ〻〻。家臣ふ指揮〻〻く
祭那戦。投返を〻〻と呼れバ。こうえいと本村又兵衛。遠結天の像
く走傷り。早石新吾ハ齎ふる戦を。奪ふんと泥蒐れバ新吾へ
これ伐奪えれ〻と激気を又義冷笑ひ。揖さ〻〻〻自軍の戦に

石野の戰場ハ
加藤主從
義勇ハ
激す

汝が藏を殉殺あさんと捉く拏伏首擒斬。右田が首に持添れば。雲井
民部はこれを驚とし〜撓むところ猛虎之助。只一槍を掛落せば。木村虎
さび首刎墮ひ。こまるれ猛威を別所勢。大中寺地を戰死〜て山城
守賀相も那波勇隅を距後あさせ。這く〜三本に逃投々。羽柴方は
今日もまく〜かりひの外を徒利をは。驍喜ぶこと限なし。城兵は戰
ふ遺くを勇士戍共ひ氣力を減し。今は兵糧運搬の通路も全く絶
塞がれ。困窮言語絶倫あり。見にはりて中國勢も。三本城扶續を方
便あふ。虛〜く本國へ歸帆あり〜けり。秀吉徒軍を賞はる中にも加藤主
從が遠殺の働大張義あり。勇あるとく。賞義もることを記とりこまる
び。此等の輩を安土境へ使者もて言狀あり〜を内府大を功賞せ
られ。又援加勢を遣はべ〜とく。三位中將信忠を大將として織田七兵衛

伝澄城久を弟秀政あびを城番を小前田又左衛門利家。流こ内
義助成政。京を四弟金藏を郎八木破河内守。後三万五千有餘人四
月十二日をりて横切へ下向ひ〜を殺を交易これらの諸將を頼
てより秀吉の智勇を張せ〜人くるまで進退全記こと伐得て大事自
然と成就をる。幸策驍義の後柄義あるを。太論の表況繼ること況

繪本豊臣記四編卷之拾終

安政七年庚申四月出版

編輯者 東京 櫻澤堂山

畫工 同 一勇齋國芳

出版人 大阪書林 岡田茂兵衛 東區博労町四丁目

同 同 松邨九兵衛 南區心齊橋筋一丁目

發賣人 東京書林 山中市兵衛 芝區三島町